

【草花の部屋】

トマト（ナス科トマト属 *Solanum lycopersicum*）

和名：ナス（茄子、茄、那須） **別名**：赤茄子、蕃茄、小金瓜、珊瑚樹茄子

英名：Tomato

ナス目 多年草

原産地：南アメリカ

花言葉：完成美、感謝

花色：黄



← 写真-1 トマトの花

撮影日：2019年06月04日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

→ 写真-2 トマトの葉

撮影日：2019年06月04日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-3 トマトの果実

撮影日：2019年06月16日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

大和郡山市郊外の家庭菜園で見かけました。特別、珍しい植物ではありませんが・・・。

日本では冬に枯死する一年生植物ですが、熱帯地方などでは多年生で、適切な環境の下では長年月にわたって生育し続け、延々と開花と結実を続けることができるそうです。1本仕立てで1年間の長期栽培を行うと、その生長量は8～10mにもなるそうです。

南米アンデス高原が原産地のトマトは、乾燥・多日照・昼夜の温度差がある気候を好みます。16世紀以前、メキシコのアステカ族がアンデス山脈からもたらされた種からトマトを栽培し始めたそうで、新大陸の中でもトマトを栽培植物として育てていたのは、この地域に限られるそうです。

ヨーロッパへは、1519年にメキシコへ上陸したエルナン・コルテスがその種を持ち帰ったのが始まりとされ、鉛が多く含まれているピューター（錫合金）食器から、トマトの酸味で漏出した鉛で中毒になっていたため、当時トマトは「poison apple」（毒リンゴ）とも・・・。日本には江戸時代に観賞用として渡来。食用としては明治時代になってからで、栽培が一般化されたのは、1935（昭和10）年頃とされています。

世界では、8,000種を超える品種があるとされ、日本では120種を超えるトマトが品種登録（農林水産省2008年5月時点）されているそうです。



← 写真-4 トマトのプラント栽培
撮影日：2017年02月01日
撮影場所：レイコルト
（アイスランド）にて
撮影者：M さん



← 写真-5、6 トマトのプラント栽培
撮影日：2017年02月01日
撮影場所：レイコルト（アイスランド）にて
撮影者：M さん



写真4～6は、レイコルト(アイスランド)で行われている、地熱を利用した温室での栽培の一例です。トマトの蔓の長さは9m。温度管理や液肥の供給など、全てパソコン。最近ではスマホで容易に管理できているようです。受粉には蜂を利用。ミツバチなのか聞いてみると、ハチとの回答。ハニーではなさそうでしたが・・・？蔓の芽摘みは人力です。

アイスランドは暖房や電力、養魚、野菜の栽培など地熱の有効利用が進んでいる国です。

通常の栽培品種(支柱に誘引するタイプ)では発芽後、本葉8葉から9葉目に最初の花房(第一花房)が付き、その後は3葉おきに花房を付ける性質を持ちます。地這栽培用の品種では2葉おきに花房をつける品種も多いそうです。また、各節位からは側枝が発生し、側枝では5葉目と6葉目に花房が付き、その後は3葉おきに花房を付けますが、側枝は、殆ど除去されているそうです。株がストレスを受けると正常な位置に花が付かない(花飛び)現象が発生するため、株が適切に生育しているかどうかを示す指針となるそうです。

わき芽を取らずに主枝とわき芽1本を伸ばす「2本仕立て」という方法もありますが、家庭菜園ではわき芽をすべて取る「1本仕立て」が良いそうです。その理由は、

- (1) 養分がわき芽に分散せず、立派な果実が収穫できる、
- (2) 風通し、日当たりがよくなるので生育も旺盛になる、など・・・。

わき芽を伸ばして収穫したい場合は、株間を広めにとり、肥料を通常よりも多めに与えると良いそうです。

甘いトマトを作るためには水分を制御することがコツ。高畝にして排水をよくするなどの工夫が必要で、乾燥気味に育てると味が良くなるそうです。また、トマトの生育には強い光が必要で、光が不足すると軟弱徒長し、花数が少なく、花質も落ち、落花も多くなります。そのため、日当たりのいい場所で栽培すると良いそうです。最初は、丈夫で作りやすく、たくさん採れるミニトマト系の品種が良いそうです。

トマトはカロテン、ビタミンC、うまみ成分のグルタミン酸などが豊富に含まれ、栄養価の高さでも群を抜きます。真っ赤な色はリコピンという色素で、抗酸化作用が注目されています。